

たにしの出世

楠山正雄

青空文庫

むかしあるところに、田を持って、畑を持って、屋敷やしきを持って、倉くらを持って、なにひとつ足りないというものがない、たいへんお金持ちのお百ひやく姓しやうがありました。それで村いちばんの長ちやう者じやとよばれて、みんなからうらやましがられていました。

この長者とおなじ村に、これはまた持っているものといつては、ふるいすきとくわとかまがいつちようずつあるばかりという、たいへん貧びん乏ぼうなお百姓ひやくしやうの夫婦ふうふがありました。長者の田を借かりて、お米やひえをつくって、その日その日のかすかなくらしを立てて

いました。

夫婦はだんだん年をとつて、毎日とはたらくのが苦しくなりました。それでもじぶんたちの跡あとをついで、代かわりにはたらいてくれる子どもがないので、あいかわらず夏も冬もなしに、水すい田でんのなかにつかつて、ひるやぶよにくわれながら汗あせみず水みづたらしはたらいで、それでもひまがあると、水みづに縁えんのある神様だといふので、水すい神じんさまのお社やしろに、夫婦しておまいりしては、

「神さま、神さま、どうぞ子どもをひとりおさずけくださいます。子どもでさえあれば、かえるの子でも、つぶの子でもよろしゅうございます」

といつて、一いっしやう生せいけんめいのりました。

するとある日、きゆうにおかみさんは、からだじゆうがむずむずして、赤ちやんが生みたくなりました。

「そろこそ水すいじん神さまのごりやくだぞ。さあ、早く神だなにお燈とうみよう

明 を上げないか」

こういつてさわいでいるうちに、おぎやあともいわずに赤ちやんが、それこそころりと、往おうらい来さきに、まるい石ころがころげ出すようにして生まれました。

まったくの話、この子は、石ころのようにちいさく、まるっこいので、つぶ、つぶとよばれている、たにしの子であつたのです。「つぶの子でもと申しあげたら、ほんとうに水神さまがたにしの子をくださつた」

夫婦ふうふはこういつて、でも、水神さまのお申し子もうごだからというので、ちいさなたにしの子をおわんに入れて、水を入れて、そのなかでだいじにそだてました。

五年たつても、十年たつても、つぶの子はやはりつぶの子で、いつまでもちいさくころころしていて、ちつとも大きくはなりませんでした。毎日、毎日、たべるだけたべてあとは一日ねてくらして、ああとも、かあとも、声ひとつ立てません。

お百ひやくしやう姓しやうのおとうさんは、やはりいつまでも貧乏びんぼうで、あいかわらず長ちやうじや者の田をたがやして、年ねんじゆう休みなしに、かせいでいました。

「やれやれ、きょうも腰こしがいたいぞ」

と、ある日、おとうさんは背中せなかをたたきながら、地主じぬしの長者屋敷やしきへ納める小作米こさくまいの俵たわらを、せつせとくらにつけていました。

するうち、ふとあたまの上で、

「おとうさん、おとうさん、そのお米はわたいが持つて行くよ」と、いう声がしました。

ふしぎにおもつて、おとうさんがあおむいて見ると、軒のきさきの高いたなの上へのせられて、たにしの子が日向ひなたぼっこしていました。

たにしの子が口をきくはずがない、なにかの空耳そらみみだろうとおもつて、かまわずしごとをしていますと、また耳のはたで、

「おとうさん、おとうさん。わたいが持つてくつてば」

とよぶ声がしました。口をきいたのは、やはりつぶの子だったのです。

「おとうさん、わたいはちいさいから馬をひいて行くことはできないけれど、こめだわら米俵の上にわたいをのせてくれれば地主じぬしさまのお屋敷やしきまで馬をつれてつてきてあげるよ」

たにしの子がずんずんそういつて口をきくと、おとうさんも、おかあさんも、ほんとうにびっくりしてしまいました。でも、この子はなにしろ水すいじん神さまのお申し子もうごだから、きつとかわったことができるのかもしれないとおもって、そういわれるままに、たにしの子を、さんびよう三俵のこめだわら米俵と米俵とのあいだに、しつかり落ちないようにのせてやって、

「じゃあ行つておいで」

といつて、馬のおしりをたたきました。

「おとうさん、おかあさん、では行つてまいります」

たにしの子は、人間の子とちつともちがわない言葉で、そうはつきりこたえて、

「さあ出かけよう。はい、しい、しい」

と、じょうずに声をかけました。馬はひひんといかないで、ぱつか、ぱつか、あるき出しました。

でも心配しんぱいなので、おとうさんがうしろからそつとついて行きますと、たにしの子は馬の上から、馬方うまかたのするとおりかけ声ひとつで、きょうに馬を進めて行きました。林の曲り角まがかどやせまいや

ぶのなかにかかる、はいどう、はいどう馬を止めて、ゆつくりあるかせます。あぶない橋はしの上でも溝川どぶがわのふちでも、ほい、ほい、いいながら、ぶじに通りぬけました。そうして、ひろい田んぼ道みちに出ると、よくすんだ、うつくしい声で、馬子まごうたをうたい出すので、馬もいい気持ちそうに、シヤン、シヤン、鈴すずを鳴ならしながら、げんきよくかけ出して行きました。

田のなかで草をとっていたお百ひゃく姓しょうたちは、馬方うまかたのかげも見えないのに、俵たわらをつけた馬だけが、のこのこ、畑道はたけみちをあるいて行くうしろ姿すがたを、みんなふしぎそうに見送っていました。

だれも人のついていない馬が、ひとりであるいてきて、こさく小作のお米をさんびよう二俵もはこび込んできたというので、ちようじややしき長者屋敷の人たちはびっくりしました。するとそれがじつはひとりでなく、ちいさなたにしが、こめだわら米俵のあいだにはさまってついてきて、俵のなかから人間のような声で、

「お米を持ってきたからおろしてください」
と、どなっているのがわかると、よけいびっくりしてしまいました。
た。

「だんなさま、たにしが馬を引いてお米を持ってきました」

と、みんながいつてさわぐので、主人の長者ものこのこ出てきました。そのあいだに、たにしの子はひとりではきはき、下男げなんたちにさしずをして、お米を馬からおろして、倉くらに積つみこませました。そうしてすすめられると、ずんずんお屋敷やしきのまんなかに通つて、——といたいところですがじつはころころがつて行つて、ごちそうのおぜんのままにすわりました。

「どうも、今日はおもてなし、ありがとうございます」

こういつて、ちいさなたにしが、りっぱに、ごあいさつの口こうじ上ようをのべたので、長ちよう者じや屋敷の人たちも、ほんとうにびつくりしてしまいました。

「いくら水神すいじんさまのお申し子もうごでも、こんなにこうな口をきくた

にしはめずらしい」

こうおもつて、長者はこのたにしを、いつまでもうちの宝たからも物のにしておきたくなりました。そこで、たにしのごきげんをとるつもりで、

「たにしどの、たにしどの、お前さんをうちのむすめのむこにとりたいが、どうだね」

といいました。すると、たにしはまじめな声で、

「それはどうもありがとうございます。ではうちへ帰つて、おとうさんとおかあさんに話してみましよう」

といつて、さもうれしそうに帰つて行きました。

たにしは帰るとさつそく、両親の百姓ひやくしやうふうふ夫婦ふうふにこの話をしま

した。お百ひやくしやう姓はおどろいて、長ちやうじゃ者ところの所へほんとうかどうか、たずねにきました。長者もいまさら、それはじょうだんだともいえないので、

「ああ、ほんとうだとも。では、ふたりのむすめをよんで、どちらがむすこさんのおよめになるかきいてみよう」

といつて、まず姉あねのむすめをよび出しました。

「かわいいたにしどのを、お前はむこにとりたいか」

こういうと、姉のむすめは半分もきかずに、

「まあ田のなかのきたない虫つけらなんか」

と、おこった声でいって、畳たたみをけ立てて出て行きました。

そこで、こんどは、妹いもうとのむすめをよび出しました。

「かわいいたにしどのを、お前はむこにとりたいか」

こういうと、妹のむすめは、

「おとうさんのお約やくそく束なさったことなら、そのとおりにいたしまししょう」

と、すなおにこたえたので、とうとう、たにしの子は長者のむこになることになりました。

三

長者のむすめは、たにしのおむこさんをだいじにして、その上、

たにしのおとうさんやおかあさんにもしんせつにしてやりました。でもこのおむこさんはあまりちいさいので、一いっしょ緒に里のおとうさんおかあさんの家へ行くときにはおよめさんはおむこさんをじぶんの帯おびのあいだに、ちよこなんとはさんで、仲なかよく話しながら行きました。でも往おうらい来の人には、帯の上におむこさんのいることがわからず、およめさんがぶつぶつひとりごとをいつてあるいているように見えるので、みんなふりかえって、ふしぎそうな顔をしました。

ある日、お天気がいいので、いつものように、帯のあいだにおむこさんをはさんで、およめさんは、お里の両親をたずねに行きました。

水神すいじんのお社やしろの前までくると、たにしのおむこさんは、

「どうも帯のあいだにのせられてばかりいるのも、きゆうくつになった。すこしおりて休んでいこう」

と、およめさんにいいました。

「ではこの上がきれいで、ひろくつていいでしょう」

と、およめさんはいつて、石の鳥居とりいの上に、おむこさんを休ませました。

「ああ、ひろい田んぼが見えて、青あおあお青あおした空がながめられて、

ひさしぶりでいい心こころ持もちだ。わたしはここでしばらく日向ひなたぼつ

こをしているから、そのあいだにお前はお社へおまいりしてくる

といいよ」

「それでは、いそいで行ってまいります」

およめさんは、それから石段をのぼって、お社やしろにおさい銭せんをあ
げて、ていねいに神さまにおじぎをして、またいそいで、石段を
おりて帰って行きました。

ところで、もとの石の鳥居とりいの所まできてみると、そこにちゃん

とのつていたはずの、たにしのおむすがたこさんの姿が見えません。鳥
居だいいしの台石たいしからころげ落ちたのかとおもって、そこらをきよろき
よろ見まわしましたが、それらしいもののかげもかたちも見えま
せん。

もしやからすが、つくちばしのさきでつばんで、持つて行っ
たのではないか、どうかしてそこの田のなかへでも、ころがっ

て行ったのであればいいがとおもつて、およめさんは田んぼのな
かにはいつてみました。春さきのこととで田のなかは、水がじくじ
くわき出していて、田の草のなかから、すみれやげんげの花が、
顔を出していました。

およめさんはよそ行ききれいな着物が、どろでよごれるのも
わすれて、水^{すいでん}田のなかへはいつて行きました。そうして、

「つぶ、つぶ、お里へまいらぬか。

つぶ、つぶ、むこどの、どこへ行^いた、

お彼岸^{ひがん}まいりにさそわれて、

からすのくちにつつかれな、

犬の足にふまれるな」

といいながら、田から田へとさがしてまわりました。どこへ行つてもたにしは数^{かず}しれずうじやうじやころがつていますが、それがあんまりおおすぎで、どれがおむこさんのたにしなのか、かいもく、わけがわからなくなつてしまいました。

およめさんは、それでもあきらめきれないので、あいかわらず、「つぶ、つぶ、お里へまいらぬか。

つぶ、つぶ、むこどの、どこへ行た^い」

といいいい、さがしてまわるうちに、春の日はいつか暮^くれて、もう田んぼのなかはよく見えないのに、からだはどろまみれになつてしまいました。すっかりくたびれて、がっかりしきつて、泣き顔になつて、およめさんは、深い深いどろ田のなかに、いまにも

ずるずる引きこまれそうになったとき、

「これ、これ、こんな所で、いつまでもなにをしているのだね」といいながら、いつどこからあらわれたか、光るようなうつくしいわかものが、涙でかすんでいるおよめさんの目の前に、にっこりわらって立っていました。

水神さまの申し子でありながら、わけがあつて、十年ものながいあいだ、たにしのからのなかに封じ込められていたのが、きよう、およめさんが水神さまのお社に参詣して、まごころをこめておいのりしてくれたおかげで、封じがとけて、このとおりりっぱなわかもの姿に、かわることができたのです。

あたりまえの人間同士のおむこさんとおよめさんになったふた

りは、あらためて水神さまのお社に、お礼れいまいりをして、めでたくうちへ帰りました。

こうして、ちいさなたにしから出世しゅっせしたおむこさんは、たにしの長ちようじゃ者とよばれて、やさしいおよめさんと一いっしょ緒しょに、末すえながく栄さかえましたと、さ。

青空文庫情報

底本：「むかし むかし あるところに」童話屋

1996（平成8）年6月24日初版発行

1996（平成8）年7月10日第2刷発行

底本の親本：「日本童話宝玉集（上中下版）」童話春秋社

1948（昭和23）～1949（昭和24）年発行

入力：鈴木厚司

校正：林 幸雄

2001年12月19日公開

2011年10月22日公開

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

たにしの出世

楠山正雄

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>